

## 60分でわかる新約聖書(13) 「テサロニケ人への手紙第一」

### 1. はじめに

#### (1) テサロニケ人への手紙第一の位置づけ

- ① 著者はパウロである。このことを疑う学者はほとんどいない。
- ② パウロは、第二次伝道旅行でテサロニケを訪問し、そこに教会を設立した。
- ③ ユダヤ人による迫害のために、そこを急に去ることになった。
- ④ 相当な量の教理を教えたが、まだ完了したわけではなかった。
- ⑤ 若い教会を励まし、教育するために、2通の手紙を書いた。
- ⑥ テサロニケ人への手紙第一は、携挙と再臨を体系的に扱っている。
  - \* 中世の時代、携挙と再臨が語られることはほとんどなかった。
  - \* 19世紀初頭、英国のブレザレンが終末論を発展させた。
  - \* その際使用したのが、2つのテサロニケ人への手紙である。
  - \* この2つがなければ、携挙と再臨を理解することが出来なかった。

#### (2) テサロニケという町

- ① マケドニア州の首都である。
- ② 交通の要衝の町で、当時の人口は、約20万人。
- ③ タルソやアテネと同じように「自由都市」であった。
  - \* 自治権が与えられている。選挙で選ばれた代表による議会政治。
  - \* 自分の貨幣を铸造することができた。
  - \* ローマ兵の部隊が駐留していなかった。
- ④ テサロニケのユダヤ人の会堂は、大きな力を持っていた。
  - \* 「神を敬う(神を恐れる)異邦人」も多くいた。
- ⑤ 偶像礼拝がもたらす道徳的墮落が蔓延していた。
  - \* ユダヤ教の自制心のある教えに感動する異邦人もいた。

#### (3) テサロニケ人への手紙第一のアウトライン

- ① あいさつ(1:1)
- ② 個人的な内容(1:2~3:13)
  - \* どのようにして教会が誕生したか。
  - \* どのようにして教会が成長したか。
  - \* どのようにして教会が確立されたか。
- ③ 実践的教え(4:1~5:24)
  - \* クリスマン生活
  - \* 携挙

\*再臨への備え

\*教会生活

\*個人的生活

④結論（5：25～28）

テサロニケ人への手紙第一の中の実践的教えについて学ぶ。

## I. クリスチャン生活（4：1～12）

### 1. 日々の歩み（4：1～2）

1Th 4:1 最後に兄弟たち。主イエスにあってお願いし、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを私たちから学び、現にそう歩んでいるのですから、ますますそうしてください。

1Th 4:2 私たちが主イエスによって、どのような命令をあなたがたに与えたか、あなたがたは知っています。

(1) パウロは、教理上の誤解、また実際生活の誤解を正そうとしている。

①行動の動機は、神への愛（神を喜ばせること）である。

②学びの目的は、すでに実行していることをさらに進めることである。

③パウロは、主イエスの權威によって語ったし、今も語っている。

### 2. 性的純潔（4：3～8）

1Th 4:3 神のみこころは、あなたがたが聖なる者となることです。あなたがたが淫らな行いを避け、

1Th 4:4 一人ひとりがわきまえて、自分のからだを聖なる尊いものとして保ち、

1Th 4:5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、

(1) テサロニケは、ギリシア・ローマの異教的文化に浸かった町。

①町には、娼婦たちもいた。

②そういう町に住んでいると、次第に罪が罪として認識されなくなる。

③パウロは、神の聖さの基準を教えている。

(2) 神がクリスチャンを召されたのは、聖潔を得させるためである。

①イエスを救い主と信じた者はみな、「聖化の歩み」へと召された。

②この教えを拒む人は、聖霊を与えてくださる神を拒んだことになる。

### 3. 兄弟愛（4：9～12）

1Th 4:9 兄弟愛については、あなたがたに書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちで、

**1Th 4:10 マケドニア全土のすべての兄弟たちに対して、それを実行しているからです。兄弟たち、あなたがたに勧めます。ますます豊かにそれを行いなさい。**

- (1) パウロは、彼らが愛を実践していることをほめている。
  - ①彼らをほめる目的は、彼らを傲慢にするためではない。
  - ②逆に、彼らが愛においてますます成長するためである。
  
- (2) テサロニケ教会には、労働を軽視する人たちがいた。
  - ①それは、主イエスの再臨について誤解があったからである。
  - ②パウロは、「落ち着いた生活をするように」と命じた。
  - ③パウロは、過剰な再臨信仰や他者へのお節介に対して警告を発した。
  - ④喜びに満ちた状態と、過熱した状態とは、別ものである。
  - ⑤信者は、働くことで生活の糧を得、神に栄光を帰す。
  - ⑥これ自体が、教会外の人たちへの証しとなる。

## II. 携挙(4:13~18)

### 1. テーマの紹介(4:13)

**1Th 4:13 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。**

- (1) テサロニケの信者の教理的弱点：携挙のテーマが紹介される。
  - ①パウロがテサロニケを去ってから、死んだ者たちが何人か出てきた。
  - ②「眠っている人たち」とは、死の婉曲的な表現である(信者にのみ使用する)。\*肉体の眠りであって、魂の眠りではない。
  - ③死んだ者たちは、携挙の際にはその祝福に与ることができないのか。
  - ④携挙(空中再臨)とは、信者が生きたまま天に挙げられることを指す。

### 2. 復活の希望(4:14~15)

**1Th 4:14 イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずですが。**

**1Th 4:15 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。**

- (1) 信者は、望みのない不信者のように悲しむ必要はない。
  - ①イエスは死んで復活された。
  - ②イエスにあって死んだ者には、復活の希望が与えられている。
  - ③携挙の時には、死んだ者は甦り、天に挙げられる。
  - ④生きている者が、死んだ者に優先するようなことは決してない。

### 3. 携挙の預言（4：16～18）

1Th 4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

1Th 4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

1Th 4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

(1) 主イエスご自身が天から下って来られる。

①主イエスは、今は父なる神の右の座に座しておられる。

(2) 携挙の様子

①号令がかかる。これは、軍隊用語で、サタンとの最後の戦いを暗示させる。

②御使いのかしらの声が響く。これは、天使ミカエルのことである。

③神のラッパが鳴り響く。

④キリストにある死者が先ず甦る。

\*「キリストにある死者」とは、教会時代の聖徒たちである。

\*旧約時代の聖徒たちは、患難期の終わりに甦る（ダニ 12：2）。

⑤次に、生き残っている者が、瞬時に携挙される。

(3) 私たちは、いつまでも主とともにいることになる。

①パウロは、自分が生存している間に携挙がある可能性を排除していない。

②携挙された聖徒たちは、主イエスが整えた場所に行く（ヨハ 14：2～3）。

③この教理の適用は、慰めである。

④携挙や再臨の希望を語らないキリスト教は、聖書的キリスト教ではない。

### Ⅲ. 再臨への備え（5：1～11）

#### 1. 主の日（5：1～5）

1Th 5:1 兄弟たち。その時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。

1Th 5:2 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。

1Th 5:3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。

(1) 携挙について語ったパウロは、次に主の日について解説している。

①「主の日」とは、旧約聖書でよく使われる言葉で、神の裁きの日を指す。

②新約時代に生きる私たちはこれを、大患難時代（患難期）と呼んでいる。

③大患難時代がいつ来るかは誰にも分からない。

④世の終わりを予告する人がいるなら、その人の教えは聖書的とは言えない。

(2) パウロは、信者と未信者とを対比させている。

- ①信者は、大患難時代を通過しない。
- ②未信者は暗闇の中にいるので、主の日は盗人のように彼らを襲う。
- ③信者の希望は、大患難時代を通過しなくてもよいということにある。

## 2. 慎み深い歩み(5:6~11)

**1Th 5:6** ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。

**1Th 5:7** 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。

(1) 未信者は眠っている。

- ①霊的な目が開かれておらず、夢を見ているか、酔ったような状態にある。

(2) 信者は「光の子ども」となった。

- ①この世の人たちのような生き方をしなくなった。
- ②眠っていないで、目を覚まして、慎み深くしているように。
  - \*不道徳の中で生活しないように。
- ③信仰と愛を胸当てとして着けるように。
  - \*これは、闇の力と戦うためである。
- ④救いの望みをかぶととしてかぶるように。
  - \*文脈では、大患難時代から救われるという希望。
  - \*その希望は、敵の攻撃や誘惑に勝利する力となる。

(3) 「目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きるようになるためです」

- ①目ざめているとは、霊的に健全な状態。
- ②眠っているとは、霊的に無関心な状態。
- ③つまり、霊的に無関心の人でも、真に救われているなら携挙される。
- ④ただし、信者としての報酬は両方で異なる。
- ⑤一度救われた人が、救いを失うことはない。

## IV. 教会生活(5:16~15)

### 1. 指導者への態度(5:12~13)

**1Th 5:12** 兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人たちを重んじ、

**1Th 5:13** その働きのゆえに、愛をもって、この上ない尊敬を払いなさい。また、お互いに平和を保ちなさい。

- (1) パウロはテサロニケの信者に、指導者を尊敬するようにと願っている。
- ①その前提に、霊的指導者は忠実に主の働きをしているという理解がある。
  - ②彼らの忠実な働きによって、再臨を待ち望む信仰が育まれる。

## 2. 互いに対する責任(5:14~15)

1Th 5:14 兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をし、すべての人に対して寛容でありなさい。

1Th 5:15 だれも、悪に対して悪を返さないように気をつけ、互いの中で、またすべての人に対して、いつも善を行うように努めなさい。

- (1) 教会生活は、お互いに責任を持ち合う共同体生活、家族生活である。
- ①責任を指導者に委ねるのではなく、互いに重荷を負い合うべきである。
  - ②気ままな者を戒める。
    - \*「気ままな者」とは、仕事にも就かずに、怠惰な生活を送っている者。
  - ③小心な者を励ます。
    - \*「小心な者」とは、愛する者を失くした悲しみから立ち直れない者。
    - \*この世の迫害や誘惑に負けてしまう者など。
  - ④弱い者を助ける。
    - \*「弱い者」とは、信仰や聖書理解が弱い者。
  - ⑤復讐するのではなく、いつも善を行なうように励むこと。

## V. 個人的生活(5:16~24)

### 1. 3つの勧告

1Th 5:16 いつも喜んでいなさい。

1Th 5:17 絶えず祈りなさい。

1Th 5:18 すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

- (1) いつも喜んでいなさい。
- ①この喜びは、キリストにある喜び、御霊による喜びである。
  - ②この喜びは、この世の人たちが味わう喜びとは根本的に異なる。
  - ③罪赦されたという確信から来る喜び。
  - ④永遠の命の希望があるという喜び。
  - ⑤再臨の主イエスに会うことができるという喜び。
  - ⑥一時的なものではなく、いつまでも続く喜び。
- (2) 絶えず祈りなさい。
- ①常に神に信頼する姿勢を教えたもの。

- ②何をするにも神の助けを求めるという習慣を育てるように、教えたもの。
- ③神の恵みがなければ、主の働きは何一つできないことを覚える。

(3) すべての事について、感謝しなさい。

- ①これは、不幸や悲劇をも感謝せよという意味ではない。
- ②感謝する対象は、神である。
- ③すべてを益に変えてくださると信じるがゆえに、感謝することができる。

2. 共同体としての生活（5：19～22）

**1Th 5:19 御霊を消してはいけません。**

**1Th 5:20 預言を軽んじてはいけません。**

**1Th 5:21 ただし、すべてを吟味し、良いものはしっかり保ちなさい。**

**1Th 5:22 あらゆる形の悪から離れなさい。**

(1) 御霊を消してはならない。

- ①御霊は、「火」としてイメージされている。
- ②御霊の働きは、肉的な思いや不信仰によって消されていく。

(2) 預言をないがしろにしてはいけない。

- ①新約聖書が完結するまでは、預言の賜物の行使が必要であった。
- ②新約聖書の完成とともに、預言の賜物はなくなった。
- ③この書簡の時代は、預言の賜物が行使されていた。
- ④テサロニケの教会では、その重要性が認識されていなかった。
- ⑤現代でも、啓示されたみことば以上に、人間の教えが重視されることがある。

(3) すべてのことを見分ける。

- ①預言の賜物を行使する人が現われた場合、それを見分ける必要がある。
- ②見分けた結果、それが聖書の教えと合致するなら、それを堅く守る必要がある。
- ③御霊の賜物は、無視するのも、無批判に受け入れるのも間違いである。

(4) 悪はどんな悪でも避ける。

- ①悪い預言だけでなく、すべての悪を避けるということ。
- ②ここには、誤った教理も含まれる。

3. 超自然的助け（5：23～24）

1Th 5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。

- (1) パウロは、テサロニケのクリスチャンたちのために祈っている。
  - ①彼らの聖化が完成するように。
  - ②そのことを為してくださるのは、「平和の神ご自身」である。
  - ③「あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように」
  - ④人間が3つの構成要素から成っていることを教えているのではない。
  - ⑤人間存在のすべてが守られるようにという祈りである。
  
- (2) 私たちをこの世から召し出された神は真実なお方である。
  - ①約束されたこと（救いの完成、聖化の完成）を必ず成し遂げてくださる。
  - ②私たちの救いの確かさは、真実な神にかかっている。